

文学模擬裁判で「なりきる」方法とプロセスの実践的研究

札 埜 和 男

一、はじめに

北海道では二〇二一年九月に、オンラインで帯広北高校、清水高校、白糠高校、札幌の弁護士、当時岡山の大学にいた筆者を結び、『羅生門』文学模擬裁判が行われた。また二〇二二年十月には清水高校で『羅生門』文学模擬裁判が実施され、二〇二三年一月には筆者の研究室が主催する文学模擬裁判の選手権に旭川東高校が参加するなど、道内にも少しずつ文学模擬裁判が広がりを見せている。文学模擬裁判とは、文学作品をモチーフにした模擬裁判を通じて、法の知識や法的思考力に留まらず、人間や社会という不条理な存在を深く考える姿勢を養う模擬裁判のことである（札埜2022・39）。通常の社会科学や各地弁護士会主催で実施される模擬裁判では、法的思考力の涵養や刑事手続きの理解が目的とされ、証拠に基づいた論理的思考力が重視されるので、演技力は重要視されない。実際にある弁護士は日本弁護士連合会（以後「日弁連」と称す）主催の高校生模擬裁判選手権の講習において「模擬裁判はお遊戯ではない」と断言した。

しかし、演劇も実践・研究領域となる国語科教育の視点からすると「模擬裁判」はその登場人物になりきることが重要であって（語弊はあるが）「お遊戯」としての側面を持つ。国語科からいえば「表現は論理を磨く」のである。思考のみに止まらず、それを身体的に表現することによって、自身の頭の中にある論理の不合理さに気づくことがある。したがって国語科における模擬裁判では「なりきる」演技指導がポイントの一つである。模擬裁判の教材としては刑事事件がほとんどであるが、その場合被告人が主人公であり、被告人の演技次第で劇としての模擬裁判は締まる（証人は準主役といえよう）。国語科で模擬裁判を行う場合、キャストがいかになりきれるかが、質の高い内容となるかの分岐点であり、どのような指導を行うかが重要になってくる。

本論では、文学模擬裁判で被告人、証人に「なりきる」にはどうしたらよいのか、授業指導者の立場から過去の文学模擬裁判などで「なりきる」姿が秀逸であると評価した三名の手記をデータとして、そのエッセンスを抽出する。そして国語科教育のドラマの考えや手法

を使いながら、「なりきる」方法とプロセスを明らかにすることを試みる。このことを明らかにすることは、模擬裁判で「なりきる」メソッドを確立することに繋がり、広く劇やドラマの手法を利用した国語科教育に貢献できる学術的・実践的意義があると考えられる。

利用するデータは、二〇二二年四月から六月にかけて兵庫県NH高校三年生を対象とした学校設定科目「言語活動」で『羅生門』模擬裁判を実施した際の被告人役（下人）と証人役（老婆）の振りの課題手記、および二〇〇七年に日弁連主催の第一回高校生模擬裁判選手権に被告人役として出た、K高校の生徒の手記である（筆者は当時K高校に勤務し、模擬裁判を指導していた）。これらを利用する理由は前述の秀逸であったこと以外に、どのようになりきったのか、手記にそのプロセスが比較的詳細に書かれているからである。

NH高校の『羅生門』模擬裁判でのデータであるが、これは二回に分けて取られている。一回目は六月の宿題レポートであり、問いは「授業についての感想および疑問点をまとめましょう」である。二回目は七月の単元終了後に出された課題である。本論文の趣旨に係る質問だけ抜き出している。質問項目（2）は「その役割を演じるためにどのような努力をしましたか」、（3）は「改めて『羅生門』を読み直して、1年の時の読みとにおいて、どういった点がどのように違いますか」、（6）は「今回の模擬裁判で一番苦労したこととその理由を答えて下さい」、（9）は「最後に、この度お世話になった札塾先

生とM先生（弁護士）に感想及び、お礼の言葉をお願いします」であった。

なお模擬裁判における「なりきる」先行研究として田中（一九九八）がある。『羅生門』での実践が記載されているが、どのようになりきったか、という分析はなされていない。『高瀬舟』での書く実践、『山月記』での寸劇、『ころ』でのインタビュー形式の授業実践が紹介されているが、いずれも生徒が授業に参加するための模索としての実践であり、「なりきる」プロセスの研究ではない。

二、証人役の手記

証人役の老婆（甲子兼（きね かね）という名前）を演じた生徒Aの手記を見てみよう。一回目の課題に対する記述である。

：裁判は悪を裁くためだけに行われるものではなく、被害者と加害者双方にとつて大切なものを守るために行われるものであり、……ただ寄り添うだけでなく相手を理解しようとする心を持ち続けることの難しさと、そうすることで得られる双方が裁判にける熱量や重みを少しではあるけれど感じる事ができてすごく楽しかったです。

授業に前向きな姿勢が見られる一方、証人としての不安は書かれていない。次は二回目の課題の回答である。冒頭（ ）内の数字は質問の番号である（以降同じ）。

(2)まず客観的に甲子兼さんについて分析しました。なぜなら普段羅生門の世界とは全く異なる時代に生きている私と甲子さんでは、価値観や善悪の判断基準に大きな差異が生じると思ったからです。

甲子さんを演じきるにはその差異をできる限りゼロにする必要がありました。次に、私と甲子さんの間にある考え方のズレの理由を探しました。「どうして甲子さんはこんなことを言ったのか」という疑問を明確にすることで甲子さんの生い立ちや性格について考えるようになり、役が決まってからずつとどこかで残っていた「他人事だ」と思う気持ちはなくなりました。また形づくりも大切にしました。気持ちに身体がついていくように、誰から見ても私が甲子さんであるように、口調や声量、このセリフにはどんな感情を乗せるべきか、誰にこの声を聞いてほしいのか、そんなことを考えながらお芝居の練習に打ち込みました。家族や友人に何度も見てもらい、試行錯誤をくりかえしました。

(3)初めて読んだときは、下人と老婆の会話(一人の言い分)にしか意識が向けられていなかったし、お互いに悪いことをしているからお互いさまだと漠然とそんなふうに思っていました。良くいえばどこまでも中立で、悪く言えば他人には無関心な考え方でした。けれど、今回の裁判を終えてから読むと会話文よりも地の文を意識していました。なぜなら下人や老婆の発した言葉よりも、地の文に書かれている彼らの動作にこそ、下人や老婆の本音が書かれているのでは

ないかと思ったからです。一年生の時の読みでは軽く流していた部分からそこに何か隠されているのではないかと、と下人や老婆の感情を汲み取るうとする読みへと変わりました。

(6)一番苦労したことは下人の人間性を傷つけないことです。私や検察官が法廷に立つ意味は、自分(被害者)を守るためであり、それは下人を傷つけてもいいという理由にはならない、なつてはいけないと思いがたらグループワークなどを重ねてきました。鋭い視点からの意見を下人に投げかけつつも、決してその言葉が刺々しいものにならないようにするためには、どんな言葉を選びとってどんな声色で伝えればよいのか、というのは自分の中にずつとありました。感じ方は人それぞれだからこそ、それを推し量るのはすごく難しかったです、改めて他者の気持ちを考えることの大切さを感じました。

苦労したこととして、なりきるのではなく、自分がイメージする老婆として、どういう言葉を発するかに苦労したことが述べられている。

三、被告人役(NH高校)の手記

次に被告人役の下人(鳴尾次郎(なるおじろう)という名前)を演じた生徒Bの手記である。一回目に書かれた感想である。

私は今回被告人である下人をするようになりました。今すごく不安で怖いです。自分の発言ひとつひとつが判決に直結していて、その

判決は自分の人生を左右するものです。自分の発言で自分の首を絞めることになってしまいかもしれない。何が質問されるか分からないし、話すことが裁判員に伝わらなかつたら意味がありません。本当にできるのかなと思つてしまいます。疑問点は被告人の正義感です。被告人主質問の時「なぜ老婆に太刀を突き付けたのか」という質問に対して「悪いことをしている奴を懲らしめるためであつて、脅すつもりはなかつた」と答えています。また「老婆に制裁を加えた」とあります。これらの正義感を持ちながら太刀を老婆に向けた行為が本当に緊急避難になるのかどうか疑問です。本当にその時恐怖心があつたのかも疑問です。

なりきれない不安を抱え、自身がなりきろうとしている人物が理解できないことへの疑問を訴えている。次は二回目の手記である。

(2)下人の鳴尾さんがどういう思いや感情を持つて行動していたのか、どのような行為をどのタイミングでしたのかを『羅生門』を何度も読み返しました。感情や行動ごとに色ペンで印をつけたがらイメージして、実演できるまで反復しながら読みました。その過程で当時の歴史的背景、地理、天候や健康状態についても情報を集めました。また法廷での口調や立ち姿も考えました。アドバイスも頂きながら少し弱くて、初めての人や状況に緊張しているであろう下人を演じました。目線を誰に向けるのか、プリントをそのまま読む

だけではなくて、抑揚をつけたリ言葉を変えたりしながらおこないました。

(3)私は一年生の時に『羅生門』を読んで、なぜ下人はこんなにも簡単に感情が揺れ動くのか、あまりわかりませんでした。盗人になるうか迷い、老婆を見たら盗人になろうと考えていたことを忘れるくらい悪を許さない気持ちになったと思えば、最終的には着物を盗んで逃走します。「たった数分の間に、心変わりすぎだなあ」と思つて私の中で下人という人物は自分中心、大事にしていきたいものがコロコロ変わる、よく分からない奴、みたいな印象でした。改めて読み直して考えてみると、下人の人物性、犯行を行った動機が大きく変わりました。「永年、使われていた主人から」、「にきびがある」、「死体があちらこちらにある」という部分から、永年働かせてもらえくらい信頼度もあり、太刀をもらえくらい心配される若者であつたという下人が読み取れて、教育も全く受けていない人物が急に死体だらけの場所に来たことへの不安、恐怖、混乱もあつたのではないかと、と犯行までの経緯と感情を想像できました。そうなるとうまくわからない奴だった下人が、より人間らしく、若者らしく、迷つて考えて、一歩が踏みだせない人物であるように感じて、身近に感じられるようになりました。実際に自分が演じたということもあり、下人と距離が近くなつたように感じました。ただ、今回被告人を演じてみて、被告人にも感情があつて思いがあつて、事件までの経緯があることを身にしみて学びました。仕事場しか知らない下人にとつ

て急に外の全く知らない世界へ投げ出されたと思つたら、その世界は頼れる人もいない、お金もない、いつ襲われるかも分からない荒れ果てたところ、という状況でした。その中で、下人が何を考えていたのかは、実際に下人になりきらないと理解できません。起こった事実だけが書かれた紙を何度読んでもわからないことです。

(6) 私が一番苦労したことは、被告人の鳴尾君になりきることでした、なりきるためには、鳴尾君の行動や過去、考えていたこと、感情など様々なことを考える必要があったからです。何度も教科書や台本を読んでなりきろうとしました。ただ「自分だったら普通こうしないのにな」と主観が入ってしまう所が幾つかあり、なぜ鳴尾君がその行動をしたのか、何を示したかったのか分からなくて悩みました。鳴尾君になりきるための理解する所が、あまり理解できなくて不安もありました。特に苦労したのは鳴尾君の正義感でした。「老婆のことをが怖くて太刀を向けた」と言いながら「老婆に制裁を加えたい」というのは矛盾している気がしていました。最初から最後まで悩んで、弁護士役の人にも何人かに相談しながら考えました。「制裁を加えたい」という部分は言わない方がいいんじゃないかとも思いました。しかしその責任感、正義感こそ若くて心揺れ動く鳴尾君をあらわすモノならば、私は堂々と胸を張って演じようと思いました。

(9) 文字を見るだけ、話を聞くだけでは分からないことも、實際行動してみることで理解できたことがたくさんありました。私は人前

で話をしたり、順序よく、分かりやすく説明することがあまり得意ではありません。今回の被告人役も緊張もあり、上手くできなかったところもありました。しかし終わった後の達成感と、執行猶予になったことへの安心感は、想像よりも大きなものでした。

途中不安を抱いていたが、最後に達成感と安心感を抱いたことから、なりきることに成功した自覚が窺える。

四、被告人(K高校)の手記

二〇〇七年に被告人を演じた生徒Cの手記を採り上げる。彼は不法侵入してナイフを突きつけて千円を奪ったとして逮捕された被告人・杉本達男を演じた。手記のタイトルは「杉本達男回顧録」である。当日Kは金髪に染めて演じた。

(前略)僕がどんな風に被告人杉本達男になつていったか、ということについて振り返つてみたいと思います。

僕が事前の準備の中で主にしていたことは、達男さん(被告人)のことをしっかりと頭に入れる、ということでした。これは調書と矛盾したことを言ってしまうといけないし、達男さんという人間をしっかりとわかっておかないと質問に答えることができないので、書くほどのことでもない当たり前のようなことですが、この作業によって自分と達男さんをほとんど同化しているような状態にまでできていました。そのことによって、質問に答えることは、資料になかったようなもの

がきたとしてもそう難しいものではありませんでした。準備段階で問題があり、修正したものというところ、はじめて演じていた自分に自信のない達男さんから、徹底的に無実を主張する達男さんに変更したくらいです。

そのときに最も意識したのは、自分のしたことの筋道を通すことでした。調書の内容を踏まえたくて、足りないところは補いながら、自分の主張を組み立てる。そしてその主張で自分のやってきたことひとつのことに筋道を通し無実を証明する。そういう考えでやっていました。

その結果、模擬裁判の本番では頭から全部達男さんになりきり、被告人達男さんの無実のストーリーを自分の中で少し組み立てることはできたと思います(中略)。振り返ってみて、模擬裁判をする上で何より大切だったのは、被告人から、検察官から、弁護人から誰から考えても、筋道を通すということだったでしょう。自分の主張の筋道を通す。その主張をどれだけ多くの人に受け入れられる、きちつと筋道の通つたものにするか、そのことの勝負だったんだと思います。

K自身が演じた被告人は彼自身とはかけ離れた人物であるが「頭から」なりきっているという記述は印象深い。

五 手記内容の比較分析

では、三者の手記を手がかりに、「なりきる」方法とプロセスを分析

していこう。

(生徒A) まず客観的に甲子兼さんについて分析しました。なぜなら普段羅生門の世界とは全く異なる時代に生きている私と甲子さんでは、価値観や善悪の判断基準に大きな差異が生じると思っただけです。

(生徒B) 下人の鳴尾さんがどういう思いや感情を持って行動していたのか、どのような行為をどのタイミングでしたのかを『羅生門』を何度も読み返しました。感情や行動ごとに色(ペン)で印をつけながらイメージして、実演できるまで反復しながら読みました。その過程で当時の歴史的背景、地理、天候や健康状態についても情報を集めました。

(生徒C) 僕が事前の準備の中で主にしていたことは、達男さん(被告人)のことをしっかり頭に入れる、ということでした。

共通するのは「分析」、「読み返し」、「頭に入れる」と表現は異なるが、テキスト(資料)を読み込み、なりきる対象となる人物がどのような人物なのか理解することであることがわかる。そして次の段階の記述はこうになっている(以降それぞれ生徒を「A、B、C」と称す)。

(A) 甲子さんを演じきるにはその差異をできる限りゼロにする必要

がありました。次に、私と甲子さんの間にある考え方のズレの理由を探しました。「どうして甲子さんはこんなことを言ったのか」という疑問を明確にすることで甲子さんの生い立ちや性格について考えるようになり、役が決まってからずっとどこかで残っていた「他人事だ」と思う気持ちはいなくなりました。また形づくりも大切にしました。気持ちに身体がついていくように、誰から見ても私が甲子さんであるように、口調や声量、このセリフにはどんな感情を乗せるべきか、誰にこの声を聞いてほしいのか、そんなことを考えながらお芝居の練習に打ち込みました

(C)これは調書と矛盾したことを言ってしまうといけないし、達男さんという人間をしつかりわかっておかないと質問に答えることができないので、書くほどのことでもない当たり前のようなことですが、この作業によって自分と達男さんをほとんど同化しているような状態にまでできていました。そのことによって、質問に答えることは、資料になかったようなものがきたとしてもそう難しいものではありませんでした。準備段階で問題があり、修正したものというとはじめて演じていた自分に自信のない達男さんから、徹底的に無実を主張する達男さんに変更したことくらいです。

「差異」を「ズレ」と称するが、Aはなりきる対象と自分とのズレを客観的に洗い出し、その理由を考えて「他人事」を「自分事」にすることに成功している。そして心情と身体が一致できるように演技の

練習に入っている。Cはなりきる対象のことを理解することで「同化」するまでになっている記述であったので、Aのようなズレの修正をしていないことについて、Cに確認したところ、次のような回答が寄せられた¹⁾。

対象者と自分のズレを洗い出して修正するという営みと同じと言えるかはわかりませんが、筋道を通すストーリーを作るうえで、自分たちが納得できるかどうかは拘ったように思います。達男さんになり切るうえで部分はあまり覚えていませんが、例えば実際の被害者の傷と包丁に関する被害者の証言の食い違いがあることに關して動きながら時間をかけて議論したように、メンバーどうしが感じた違和感を言葉にして議論し、納得感のある筋道を作ったように記憶しています。あまり意識しないながら、なり切る対象者への違和感の洗い出しと消し込みはやっていたように思います。

Cは仲間との議論を通じてズレの修正を行っていたようである。二人とも身体と言葉の一致を目指して練習に入っているが、AとCはその後、さらに進めて、なりきった上で法廷「戦略を立てている」「方針」といっても良いかもしれない。Aでいうと、発する言葉によって決して被告人を傷つけないという戦略である。

(A) 一番苦勞したことは下人の人間性を傷つけないことです。私や検察官が法廷に立つ意味は、自分(被害者)を守るためであり、それは下人を傷つけてもいいという理由にはならない、なつてはいけな
いと思ひながらグループワークなどを重ねてきました。鋭い視点からの意見を下人に投げかけつつも、決してその言葉が刺々しいものにならないようにするためには、どんな言葉を選びとつてどんな声色で伝えればよいのか、というのは自分の中にずっとありました。

Cの戦略は無罪を勝ち取るために「達男さん」像を自身の中で変容させることであつた。それは逮捕された時に怯えて自分の言つたことに自信のない「達男さん」を、罪を本当に犯していない、やつていないと主張する「達男さん」に進化(深化)させることであつた。

(C) 準備段階で問題があり、修正したものという、はじめて演じていた自分に自信のない達男さんから、徹底的に無実を主張する達男さんに変更したことくらいです。そのときに最も意識したのは、自分のしたことの筋道を通すことでした。調書の内容を踏まえたうえで、足りないところは補ひながら、自分の主張を組み立てる。そしてその主張で自分のやつてきたことひとつのことに筋道を通し無実を証明する。そういう考えでやつていました。

一方Bは「法廷」での口調や立ち姿も考えました。アドバイスも頂

きながら少し弱くて、初めての人や状況に緊張しているであらう下人を演じました。目線を誰に向けるのか、プリントをそのまま読むだけではなくて、抑揚をつけたリ言葉を変えたりしながらおこないましたと言葉と身体的一致を目指して取り組むが、AやCに比して「なりきれない」違和感を抱いている。ズレの修正がうまくいかなかったのである。

(B) 私が一番苦勞したことは、被告人の鳴尾君になりきることでした。なりきるためには、鳴尾君の行動や過去、考えていたこと、感情など様々なことを考える必要があつたからです。何度も教科書や台本を読んでなりきろうとしました。ただ「自分だったら普通こうしないのにな」と主観が入つてしまう所が幾つかあり、なぜ鳴尾君がその行動をしたのか、何を示したのか分からなくて悩みました。鳴尾君になりきるための理解する所が、あまり理解できなくて不安もありました。特に苦勞したのは鳴尾君の正義感でした。「老婆のことをが怖くて太刀を向けた」と言いながら「老婆に制裁を加えたい」というのは矛盾している気がしていました。最初から最後まで悩んで、弁護士役の人にも何人かに相談しながら考えました。

この「なりきれない」ことについては次章で取り上げる。

六 違和感の持つ意味

文学模擬裁判で「なりきる」ことの説明には「ドラマ」の考

えが適切であろう。渡辺他（2020）による「表現と理解の相互循環」および「架空の世界を感じる」との考えである。「あらかじめ考えておいたことをただ行うのではなく、役になって動くことで架空の世界を経験し、気付きが得られる。そのようにして表現と理解の相互循環が生じる」（渡辺2020 1…18）という考えである。「なつてみる学び」（役になつて架空の世界の中で感情を動かすことで、当初自分が考えていた以上のものが引き出される）であるといえる。

AやCは「なつてみる学び」を知らなくてもその学びを行っているといえる。一方、違和感を抱いてスムーズにいかなかったBの場合はどう考えたらよいだろうか。

人類学の視点からドラマを考える石野は「人が変わる瞬間とは、端的に言つて人が境界に立ち、足元を揺るがされる体験をするときに起こる。そして、それは自他の間で起こることが多い。そのとき、他者を演じるという方法は力を発揮する。ここで言う『他者』とは、自分の理解の及ばない／理解困難な相手を指す。つまり、『他者を演じる』ことは、単に自分以外の誰かを演じるという意味には留まらない」（2017…218）とし「従来の演劇教育の方法では、必ずしもここという他者と遭遇できていたとは言えない」（2017…218）という。そして「従来の演劇教育で多用されてきたフィクションの世界を前提に演じ、ロールプレイを用いる方法は、時に他者との遭

遇を阻んでいる」（2017…218）とする。その理由として、「フィクションは演じ手自らの想像力の世界に引き寄せて他者像を描けてしまうこと、ロールプレイは『役割』に還元された『粗い他者像』に集約していくこと」（2017…218）にあると述べる。これを克服する方法は、人類学の方法論と思想を応用した「現実の人間を写実的に演じるといふ手法」、「他者をなぞるように演じる」ことであると主張する（2017…218）。

石野は勤務先での「他者をなぞるように演じる」授業実践で、履修生に対して「現場の中で『何か心にひっかかりをおぼえたこと』を、自分の意見や価値判断を入れずにニュートラルに写し取って再現すること」（2017…224）という指示を行う。石野は「ひっかかり」を「そうとしか表現できないようなもの、感覚的なもの」、「何か気になるけれど、その正体が分からないような、すぐに解答が得られないような、善悪で割り切れないような未知の領域に関わる出来事」であり、「境界体験の入口」、「ざわざわした心持ちを引き起こす」ものであると表現する（2017…224）。さらに、その「ひっかかり」は『『他人事』にはさせない力を引き起こし、「自分の見たい他者像をひきつけ、フィクションの世界として造形することへ逃げることを阻む」（2017…244）ものだという。石野は履修生の学生が体験先のフリースクールでの生徒との関わり

でひっかかりを感じた場面を『「他者をなぞるよう演じる」という方法をとることで、自ら設定した自他の境界を揺るがされ、変容し、他者との関わり方が変わっていく』（2017・248）事例を紹介している。

Bの「なりきれない」違和感は、石野のいう「ひっかかり」であるといえるのではなからうか。Bの悩みは石野の論でいうと、極めて自他を乗り越えるのに重要な悩みであると考えられる。石野は「ひっかかり」の解決にその場面を「他者をなぞるように演じる方法」の有効性を説くが、Bが記している解決方法は「弁護士役の人にも何人かに相談しながら考えました」とあるように、他者との議論であった。そして次のような決意を抱くに至る。

「制裁を加えたい」という部分は言わない方がいいんじゃないかとも思いました。しかしその責任感、正義感こそ若くて心揺れ動く鳴尾君をあらわすモノならば、私は堂々と胸を張って演じようと思いました。

Bは判決時には「終わった後の達成感と、執行猶予になったことへの安心感は、想像よりも大きなものでした」と振り返っているところから、自分なりになりきったという思いがあったのだろう。ただ「なりきれない」違和感を克服するために、「他者をなぞるように演じる」

ことをどこまで実施したのかは定かではない。しかし次のように振り返っているところから、被告人として振る舞うという行動を試していたことが推察される。

（B）実際に自分が演じたということもあり、下人と距離が近くなつたように感じました。…その中で、下人が何を考えていたのかは、実際に下人になりきれないと理解できません。…起こった事実だけが書かれた紙を何度読んでもわからないことです。…文字を見るだけ、話を聞くだけでは分からないことも、実際行動してみることで理解できたことがたくさんありました。

七「なりきる」方法とプロセスに関する仮説

以上、三者の手記をもとにドラマの手法や考えを使いながら、「なりきる」ための方法やプロセスについて分析してきた。文学模範裁判で「なりきる」方法やプロセスについて、仮説を示しておきたい。それを示す前に二つの考えを紹介しておく。

一つ目は演劇専門家の知見である。筆者が高校教員として模範裁判を指導していた時には、ほぼ毎年、羽鳥三実広氏（元『劇団四季』演出家・現大阪音楽大学短期大学部教授・ミュージカルコース教育主任）を招いた。氏が指導の中で常に口にされているのが「自分がわかって言っていることが相手に伝わっていると思うな。常に相手に伝わっているかを考える。上手な役者は一心不乱に演じているのではなくて考えながらやって

いる」という言葉である。二つ目は先述のCとのやりとりでの言葉である。Cに対してなりきった状態の理想として、羽鳥の知見を受けて「自分の中になりきった対象と、それを客観的に見ているもうひとりの自分がいる状態」ではないか、という考えを示すと、次のような回答があった⁽²⁾。

私の感覚としては、むしろなり切る前の方が客観的に見ている「自分」の考えが邪魔をして、それが変に検査側の質問を理解してしまっただろうことになる、自分に自信がなくなるというようになったと思います。ただ、客観的に見ることができの方がより強固なストーリーを作ることに関与するので、「なりきった状態」と「客観的に見ている自分」を自由に行き来できることが重要なのだと考えます。

これら二つのことを考え合わせて「なりきる」方法とプロセスの仮説を示すと次のようになる。

- ①「なりきる」対象者に関する資料を読み込んで、人物像を理解する。
- ②その対象者と自分自身のズレ（違和感）を抽出する。
- ③そのズレ（違和感）を資料の中で再度読み合わせながら、そのズレを修正する。その際、対象者の視点で読む。

④そのズレが納得できない、「ひっかかり」がある場合は無理に頭の中で理解しようとしなない。

⑤「ひっかかり」があってもなくても実際に身体を動かして演じてみる。

⑥法廷でどんな対象者を演じるか、戦略（方針）を立てる。

⑦立てた上で、さらに身体的に演じる。

⑧なりきった状態になったと感じても、常に客観的に見ている自分を意識して、対象者と自分を行き来しながら演じる。

石野の考えにあるように「ひっかかり」を感じた時に、自分の思考や仲間との議論の中で「きれいに予定調和的」に理解しないことが大切なのであろう。文学の中での話になるので、石野の例のように実際の「現場をなぞる」ことは不可能であるが、想像の中で違和感を抱きながらも身体的に演じながら考えることが鍵となると思われる。

八 今後の課題

本稿で述べた方法とプロセスは仮説の域を出ない。石野のいうように「自分の見たい他者像をひきつけ、フィクションの世界として造形することへ逃げることを阻み、自ら設定した自他の境界を揺るがされ、変容し、他者との関わり方が変わっていく」ことになったかどうかの確証までには至っていない。そもそも三者とも「なりきる」ことに秀逸だったが、A・Bは「文

学模擬裁判」で、Cは普通の「模擬裁判」であり、比較対象として適切かといわれると適切だとは言いい切れない(なりきるハードルは時代背景を加味する分、前者のほうが高いといえる)。今後は本稿で示した仮説を意識しながら現場での指導を繰り返す実践的研究を重ねることで、生徒が「なりきる」方法とプロセスを丁寧に聴き取り、データとして集積する必要がある。文学模擬裁判であっても単なる模擬裁判であっても、「なりきる」ことで自分とは全く異質と感じられる被告人や犯罪者とされる人物と自分自身が「地続きである」という体感的理解を得ることが、「他人事」とはせず「自分事」として考える上で、極めて重要なことであると思われる。またその方法やプロセス及び指導方法を明確にすることは、国語科教育の文学の読解にも応用できる可能性があると考えられる。その観点からも「なりきる」方法とプロセスの調査研究はさらに進める意義があるだろう。

注

- (1) 2023年2月26日付のCからのメールによる。
(2) 同じく2月26日付けのメールの回答である。

参考文献

石野由香里(2017)『他者を『なぞり』境界に立つ―演劇・人類学・

社会参加の境界に「川島裕子編『教師』になる劇場 演劇的手法による学びとミニケーションのデザイン』フィルムアート社

pp.217-254

田中啓介(1998)「小説教材での『なりきる』工夫―授業参加を目指しての模索」広島大学教育学部光葉会『国語教育研究』41号

pp.73-83

札埜和男(2022)「回顧と展望―文学模擬裁判の実践的研究」『龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究紀要』第2巻 pp.37-48

渡辺貴裕・藤原由香里(2020)『なってみる学び 演劇的手法で変わる授業と学校』時事通信出版局

謝辞

木村健裕氏・高礪浩氏に多大なご協力を頂きました。

本稿は、JSPS 科研費 JP20K02809 の助成を受けた研究成果の一部です。

(ふだのかずお／龍谷大学文学部哲学科)